

精神科医の思うこと②⑧

思い出の予備校の先生たち

松村 奈奈子

テレビで塾や予備校のCMが流れ始めて、受験もたけなわ。先週、中学生の診察では、早くも私立高校合格の報告を受け「おめでとうー」と子供たちと盛り上がったばかりです。

そんな私、高校時代に映画ばかりみて勉強をさぼったツケで、大学受験では苦戦し、有名予備校や小さな予備校など、けっこう長く予備校に通いました。小学校、中学校、高校は地元の公立学校で、もちろん記憶に残る先生にも会いましたが、私にとって一番心に残っている先生は、予備校で出会ったキョーレツな講師陣でした。もう40年程前の事ですが、私の人生に大きく影響し、今でも鮮明に記憶に残っています。なので、今回のテーマは「思い出の予備校の先生たち」

有名な女性講師は、美人で化粧もバッチリ、チョークを持つ指には赤いマニキュアが印象的でした。浪人生の間では「子どもが3人いるが全て父親が違う」と噂話がでてました。授業もいきなり「朝、家を出ようとしたら家のカギがなくて・・・」と朝の自分のトラブルを話します。「で、2歳の子が誤ってゴミ箱に入れたと推理して、ごみ箱で見つかったのよー」と何でもない家での話を10分以上します。でも、これが魅力的。「私生活は完璧ではない自分だけど、授業は上手なのよー」というメッセージが伝わります。人間って完璧な人などいるわけがなくて、得意・不得意があっていい！という教育は、当時の学校教育からは私には得られなかったメッセージでした。今までの学校の先生は、欠点を隠すところがツマラナかったのです。

有名な英語講師は、授業ではテキストを毎回5行ぐらいしか進めません。「元全共闘なんだよ」「自分は社会性がないから」「企業などには務められないし」など自分を語ったり、「先日、美術館でフランスの画家クールベの波の絵を見た」「ただの波の絵だが、

魅了されてしまった」「君たちも行ってみたらいい」と熱く語ります。今まで、会った事のない大人の話、私を含めて多くの浪人生が熱心に聞き入ってしまうのです。

新人の英語の講師は、自己紹介で私と同じ高校を卒業していると話し、より身近に感じた先生でした。3年浪人して京都大学に進学するまでの苦労話がおもしろい。「3年目の浪人は宅浪で、家に籠って寝ていたら、ベッドの柵が歪んで見えただよー、こりゃ3年で浪人やめんとダメになると感じたわ」となんとも不思議感覚が魅力的。夏休み明けの講義では、「夏休みは一人で歩いて能登半島を周った。Tシャツもパンツも2枚あればいいんだよ。リュックの背にくくって歩けば、すぐ乾く」と、旅の魅力を語ります。青い海を背景に、先生がもくもくと海沿いの道を一人で歩く姿は、容易に想像できました。「旅の間は、一緒に住んでいる彼女に、毎日電話をするのが日課」と話し、まだ事実婚が珍しい時代に、そういう生き方もあるんだーと勉強になりました。

でも、1番印象に残っている講師、それは小さい予備校の国語の先生でした。医学部には小論文の試験があるところが多く、小論文の授業でした。その先生は大阪大学文学部の博士課程の大学院生で、アルバイトで講義にきていると話します。これまた「先週、森田芳光監督の映画みて面白かった。僕の授業を聞かずに映画を見に行った方が人生の勉強になるよ」と講義するユニークな先生でした。小論文の練習もテーマは自由で、提出した小論文にいつも丁寧にコメントをつけてくれました。当時の私は読書家で文章を書くのが好きで、作家や脚本家に憧れていました。そういうやり取りの中、私が勝手に『幸福感』というテーマで書いた文章への先生からの返事が1番の宝物です。

それは「あなたの文についてコメントを書く事は熱い。教師として書いたらカンタンだ。もっと他の人にわかるように書きなさい、と。しかし感覚的に私はそう言いたくない。あなた自身にもわかっていない自分の中の何かを、そう簡単に表現できるものか。これからすべきことは、その何かをいかにして表現してゆくかとゆう事だ。授業や勉強のことなど何も恥じる必要はない。ただ少なくともあなたの中にある何かからは逃げないで欲しい。《途中省略》今の一般的社会的ルールに自分を無理にあてはめる必要はない、ということ。ただ、そうして生きてゆくためには、少なくとも他の人から壊されない自分自身のルールを作る必要がある」という長文のコメントでした。

ちょっと周囲に違和感をもち「自分はこれでいいのか？」とちょっぴり悩んだ10代の私に、初めて自信を与えてくれた大人でした。今読み直すと、先生も私も、若くて熱いなー、なんて感じのやりとりですが、私の人生を救ってくれた様にも思います。そして、先生の添削してくれた原稿用紙は、40年たった今もすべて大事にとってあります。私のちょっぴり自慢話であり、大切な宝物です。今回、マガジンの原稿を書くので、久しぶりに添削してくれた原稿を出して、先生の名前を検索したら、先生はそのあと国立大学の教授をされ、本もいくつか書かれていました。スゴイ先生だったのかー。ふと、

アマゾンでポチって、先生に再び触れたいくなりました。

今では予備校は少数の有名講師が直接講義ではなく、配信のかたちで活躍する時代です。直接あって、息遣いを感じる事も減ったと聞きます。

予備校では、人生の多様性に触れ、生き方に自信をもつ事の大切さを教えてくれた様に思います。それが「なぜ大学に行くのか」「なぜ勉強するのか」につながり、受験に向かわせるエネルギーを与えるのが、予備校講師の仕事だったのかなあなんて思っています。受験テクニックの伝授は、小さなことなのかもしれません。

しかし、全ての教育者が同じことをできるわけではなく、一般の公立学校の先生たちは、標準的な授業をしなくてはならないので、予備校講師の様に自由に授業ができないのも十分理解しています。さらに、大学を目指すモチベーションの高い学生相手に話す予備校講師は、大人として楽しいだろうなって思います。勉強嫌いの子供たちには、難しい事です。

私も数年間、病院付属の看護学校の講師をした事があります。あこがれの予備校講師をまねて、授業の最初の10分は、自分の経験や思った事を話しながら、人生を楽しみながら医療の仕事を好きになってほしいなあという思いを込めて授業しました。学期末テストには必ず大きくフリースペースをとって感想を書いてもらってました。その時、多くの生徒が授業の前の雑談が良かったと書いてくれて、嬉しかったのを覚えています。

大人がどう生きているのかを見せるのは、大切なんだと思います。ほんと、予備校に行けてよかったし、親には感謝しております。